

講演会講師論考

総会記念講演

大分の方言について

松田 美香

平成二六年五月六日（火）、別府市中央公民館で行われた別府史談会の記念講演として、「大分の方言について」という題で話をさせていただいた。以下は、その時の内容を加筆・修正したものである。

1. 講師自己紹介

千葉大学文学部で卒業論文として取り組んだのは、「大分県周防灘周辺地域の『グ助詞』研究」であった。主格助詞の「が」にあたる「グ」は、接続助詞の部分でも使用されることや、前接の音が狭母音（イ、ウ）や撥音（ン）になるとほとんど出現しないことがわかった。その分布は中津市や宇佐市を中心に、北は福岡県行橋市、東は国東半島の中心部大田村まで広がっており、周防灘沿岸地域とその周辺に分布する

ことを臨地調査と通信調査によって明らかにしたⁱ。

別府大学着任の後、大分方言の可能表現、性向語彙、ことわざ、談話などの調査研究を行っており、九州方言研究会で共同執筆した『これが九州方言の底力！』（共著・大修館書店）や、県内の高齢者への聞き取り調査等の成果『百歳イリエおばあちゃんの知恵袋―伝えたい大分の方言・ことわざ・レシピー』（編著・自費出版）がある。

2. 音声・アクセントから見た大分方言

方言に限らず、言語の基盤は「音」である。日本語は原則としてCV（子音＋母音）構造だが、母音単独の場合もあるし、子音と母音の間に半母音（ヤ行やワ行の母音に先立つ音）が入る場合もある。また、特殊拍と呼ばれる撥音（ン）、促音（ッ）、長音（ー）もある。

アクセントはひとつの単語に決められた相対的な音の高低の規則であり、文全体の音のうねりのような上昇や下降を表すイントネーションとは区別する。

【大分方言の音声的特徴】

・ 連母音の融合が起こりやすい

表1 2拍名詞のアクセント

アクセントの例	()内は、続く動詞など。	
風	カ「ゼ	カ「ゼガ(フク。)
鳥	ト「リ	ト「リガ(トブ。)
旗	ハ「タ 共通語	ハ「タガ(アガル。) ハ「タガ
橋	ハ「シ 共通語	ハ「シオ(ワタル。) ハ「シオ
犬	イ「ヌ	イ「ヌガ(ハシル。)
空	ソ「ラ	ソ「ラガ(ミエル。)
春	ハ「ル	ハ「ルガ(キタ。)

「: 相対的に高くなる
 ˊ: 相対的に低くなる

※「旗」「橋」など、一部は
 高低が異なる。
 2段のところは、上段が
 大分方言、下段が共通語
 のアクセント。

(青い…アウエー、安い…ヤシー、儂は…ワシヤー…)
 ・古い日本語音声が残っている(ト…トウ、ズ…ドウ、
 セ…シエ、ゼ…ジエ…)
 ・テ ↓ チエ ↓ チ、デ ↓ (デエ) ↓ ジ
 などの口蓋化現象がある
 ・ザ行 ↓ ダ行 の変化が多い(座布団…ダブトン、
 雑巾…ドーキン、溝…ミド…)
 ・アクセントは共通語(東京方言)と一部が違うだけ
 (北西九州地域は無アクセント)

『大分話し言葉
 は、大野秀臣編
 』
 なお、用例

さる。 徴を捉えたり
 することがで
 きる。

3. 語彙(ごい)
 から見た大分
 方言
 「語彙」とは、
 単語のましま
 りのことを指
 す。単語は非
 常に数が多い
 ので全体を把
 握するのは難
 しいが、範囲
 を区切って見
 ることにより、
 比較したり特
 徴を捉えたり
 することがで
 きる。

表2 古典語由来の大分方言

方言形(古典語)	古典意味	方言意味	大分方言の用例
イビシー(いぶせし)	気味悪い	気味が悪い	蛇が 死んじよる。イビシーなー。
ウタチー(うたてし)	気に染まない	汚らしくて いやだ	あんしは 何日も 風呂に 入っちゃらん けん、ウタチーわい。
サカシー(さかし)	丈夫で達者 である	元気だ	サカシュー しちよったかえー? (サカシュー: さかしく)
ムゲネー(無下なし)	何とも言い ようのない こと(無下)	かわいそう だ	犬が 車に ひかれち 死んじよるわ。 ムゲネーなー。
オジー(おぞし)	恐ろしい	恐ろしい	夜の 便所にや、 オジーで 行けれん。
ヨダキー(よだけし)	億劫だ	億劫だ	昨日、飲み会やったんで、 今日の講義、ヨダキー。

用語用例辞典』(2003年)からの引用である。

また、以下のような語もかなり古くから使われていることがわかる。

- ・アユル(落ちる)・・・万葉集(奈良時代)
- ・オトゴ(末子)弟子、乙子
・・・今昔物語(平安時代)
- ・ナエ(地震)「な」||土地+「ナ」||居場所
・・・日葡辞書(室町時代末)
- ・バサレー(非常な、法外な) 婆婆羅+い
・・・「ばさら」..太平記(南北朝時代)

他にも語源を辿れる語はあるが、主なものを概観しただけでも古典語の面影を残す語が方言として確かに残っていることがわかる。

また、方言とは気づかれにくく、共通語あるいは東京方言だと思われて使われている方言もある。このような語を「気づきにくい方言」と呼ぶ。

【大分方言の「気づきにくい方言」】

- ・ナオス(直す)

・・・共通語の「片付ける」

・メンドシー(面倒しい)

・・・共通語の「恥ずかしい」

・キノドキー(気の毒い?)

・・・共通語の「申し訳なく思う」

・ハワク(掃わく)

・・・共通語の「掃く(はく)」

・コユイ(濃ゆい)

・・・共通語の「濃い(こい)」

・アツテイル(在っている?)

・・・共通語の「やっている」

・カルー(担ふ)

・・・共通語の「背負う」

・カタル・カテル(糶てる)

・・・共通語の「仲間に入れる」

以上は発表者が「気づいた」大分方言であり、「気づかれにくい」ので「気づかない方言」もまだあると思われる。

4. 文法から見た大分方言

まず、古い動詞活用が残っているという特徴を紹介した。「起きる」の過去形を「オケタ」、「オケタ」は言わなくても、「オクルトキ(起きる時)」や「オクリヤーイー(起きればいい)」などと言っているならば、その人は動詞の古い活用を使っているのである。

「オクル」の「ク」、それから「オキン」の「キ」あるいは「オケン」の「ケ」のどちらかを言えば、キ・クあるいはク・ケの二段を使う活用、それぞれ「上二段活用」「下二段活用」になる。「オケン」と「ケ」を使うのは県南部であり、「負ける」「助ける」などの下二段活用に合流(影響されて同じ活用へと変化)したと考えられる。

同時に、大分方言の活用には新しい変化と見られる活用が存在する。ラ行の一段活用が五段活用に近づく「ラ行五段化」現象である。

本来の一段活用では、否定形に「ラ」が入らない。しかし、他の動詞「取る」「乗る」「掛かる」など五段活用の否定形「トラン」「ノラン」「カカラン」の「ラン」の部分抽出し、否

表3 動詞の活用比較 (「起きる」)

	動詞「起きる」 (上一段活用)	大分方言「起くる」 (上二段・下二段活用)
終止形	オキル	オクル
連用形／過去形	オキテ／オキタ	オキチ・オケチ／オキタ・オケタ
否定形	オキナイ	オキン・オケン
仮定形	オキレバ	オクリヤー
命令形	オキロ	オキー

表4 大分方言のラ行五段化現象

動詞	見る	着る	寝る	出る
否定形	ミラン	キラン	ネラン	デラン
～ます形	ミリマス	キリマス	ネリマス	デリマス
言い切り形	ミル	キル	ネル	デル
仮定形	ミレバ (ミリヤ)	キレバ (キリヤ)	ネレバ (ネリヤ)	デレバ (デリヤ)
意向形	ミロー	キロー	ネロー	デロー

定の接尾辞的として利用した結果と考えられる。現在、「ます形（連用形）」の「ミリマス（見ます）」「キリマス（着ます）」などはほとんど聞かれないが、そう言う段階に至れば「ラ行五段化」は完成する。九州の西側のほうがこの現象が盛んであり、「新しい体系の形成」として注目されているⁱⁱ。

現在の大方方言では、命令形が「ミー」「ミレ」「ミリヨ」「ミロ」など、さまざまな形になっている。これも「取る」「乗る」などのラ行五段活用に影響された「五段活用化現象」と言える。

次に、共通語では「ようこそ」「こちらこそ」などの形としては残っているが、完全な形では使われなくなってしまう「係り結び」が大方方言にはまだ残っている例を紹介する。平安時代に書かれた『枕草子』に「思はむ子を法師になしたらむこそ、心苦しけれ。（親がいとしいと思うような子を法師にしたとしたら、まことに気の毒だ。）」（思はむ子を）があるように、係り結びとは、ある語や語句を「こそ」「ぞ」などの係助詞で取り立て、それに呼応して述語部分は「こそ」なら已然形、「ぞ」なら連体形で締めくくるといふ文の規則である。以下は大方方言の50年前を伝える資料『方言生活30年の変容』からの引用である。

ジューハチノ ヨーナ ココロモチコ シチヨレ

（真玉町 S. 31収録）

18歳の ような 心持ちこそ しているよ。

シカタガ アツチェックセ（しかたがあるもんか。）

（山香町 S. 31収録）

仕方が あつてこそ

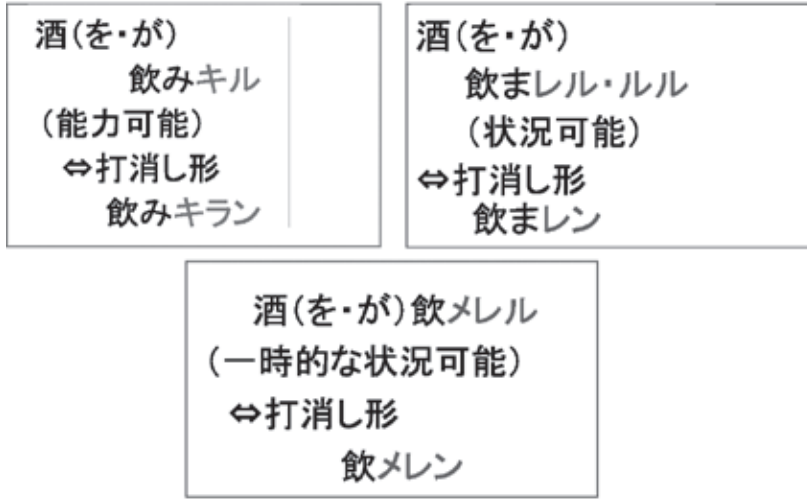
マー キョーコ ハジメテ マー ハナシ キーテ

（宇佐市長洲 S. 58収録）

まあ 今日こそ 初めて まあ 話を 聞いて

宇佐市の焼酎「いいちこ」もまさにこの係り結びによる「良い（とこそあれ!）」の意味でネーミングされたものであろう。最初の例以外、省略等によって「結び」が脱落しているのは共通語と同じ傾向であるが、まだ「結び」まで語る人もいる点で、大方方言には古典の文法が生きていると言える。

図1 大分方言の可能表現 意味と形式の関係



5. 大分方言の表現法
 表現あるいは表現法とは、語彙や文法の範疇には収まりきれない、それらが作用し合っている意味領域を表し分ける言語現象を意味する。今回は、大分方言の可能表現と敬語表現

を取り上げた。

まず、大分方言の可能の表現は、共通語より詳しい意味を表し分けることができる。

たとえば、自動車で来ているから「お酒を飲むことができ
ない」場合は「今日は酒が飲まレン」と言い、下戸だという
場合は「ワシヤ酒を飲みキラン」、何日も宴会が続いて体調
不良の場合は「今夜は酒が飲メレン」と言うのである。この
使い分けは地域によっては曖昧なところもあるが、おおむね
このようにキル(…能力可能)、ルル(…状況可能)、おレル
という可能動詞にレルを添加したもの(…一時的な状況可能)
を使い分けている。共通語には五段動詞なら可能動詞、一段
活用とカ行変格活用(来る)なら未然形+ラレル、「する」
はデキルという、それぞれ一つの形しかないと考えると、
複雑ではあるが豊かな表現であると言えるだろう。

日本全国を見渡してみると、可能表現の形はいろいろある。
能力可能を表す形を列挙すると、

- ・長崎 「ノミユル」「ノミエル」・・・(飲み得る)
- ・鹿児島 「ノミガナル」「ノンガナル」・・・(飲みが成る)
- ・関西地方 「ノメル」(否定形に「ヨーノマン」)

・・・・(飲み得る? 飲まれる?)

・東北地方「ノムニイー」・・・(飲むに良い)

のように、さまざまな表し方がある。状況可能の方は未然形＋ラレルの地域が圧倒的に広いことを考えると、可能を表す言い方は能力可能を言い分ける必要性が生じたことから、状況可能から新たに形を作りだした可能性が高い。大分県の地理的位置を考えると、瀬戸内海文化と九州文化のぶつかるところである。それらの方言の重なりが、意味の三分区を作り出した原因と考えられる。

次に、大分方言の敬語を取り上げる。敬語には方言的なものが少ないと言われるが、無いわけではない。

・文末の「 안타ナー」

アンタ ドコ イクカ アンタナー (宇佐など北部)

タナー

・文末の「ㇿデ」

アンタ ドコ イクデ↓(下降) (中津など北部)

・文末の「エ」

アンタ ドコ イクカエ↓(下降) (大分県全域)

これらは問いかけの文末で、文全体に敬意を加える役割があり、今でもよく聞かれる。

他に地域限定で以下のような方言敬語もある。

言いナハイ(ナサイ) 命令

言いナハンナ(ナサンナ) 禁止

言わンシ 命令

言わンスナ 禁止

「ㇿンシ」は県南部で聞かれる。どれも「なさる」系の語であり、共通語でも使われているので、目立ちにくい。また、江戸時代の「小藩分立」により、県内に大きな藩が長期間支配体制を築くということがなかった。そのため、九州の他県に見られるような細分化された複雑な敬語体系を必要とせず、目立った方言敬語がないと考えられる。

6. 注目すべき大分方言

大分方言語彙を、「珍しい」「調子の良さ」の二つの観点から選り出した。

まず、「アド（踵）」、「エラ・イラ（鱗）」は、一九六〇年代の全国調査によると、大分だけに分布があり、大変珍しい方言である。「ゴテーシン（不精な）」も「五体死に」から変化した語だが、何もしないから身体が死んでいるようだというたとえ方が珍しいと思われる。「ウツシエー・ウツセー（不味い）」も豊前地域で使われるが、語源も不明であり、他地域では使用されていないようで珍しい。「スモツクレン（役に立たない）」は、動物の「巢」、あるいは柑橘類の「酢」も作れないということから来ているというが、どちらが語源であったとしても、ユーモアのある言い方である。郷土料理の名前である「ヤセウマ（小麦団子を細長く引き伸ばし、黄粉や小豆餡を絡めたもの）」も、珍しい。他の地域であれば「ダング」と名付けられそうな料理であるが、なぜ「ヤセウマ」なのか、疑問が残る。一説に、京都から落ち延びてきた貴人が乳母（八瀬）に「あの旨いものを・・・」と言うとき、「ヤセ、ウマ・・・」と言ったからだというが、他地域では「痩せた馬」に似ているからだと言う。長野県の「ヤシヨウマ」は仏教行事で配られる菓子名であり、大分同様に仏が弟子のヤシヨに「うまい」と言ったからとか、痩せ馬に似ているからだと伝えられているそうであり、関係がありそうで興味深い。

い。

次に、調子の良さを感じる大分方言である。「ホゲホッポー（でたらめ）」「オーチャキー（横着な）」「イヒユーナ（異風な）」「オットロシヤ（驚きを表す）」「マツピー（真っ青）」などがある。促音、長音、拗音、半濁音（ピャポ）が組み合わさり、1単語の中にリズムが生まれる点で調子の良さを感じるのだろう。また、逆に「オヒナレ（おはよう）」や「オヨンナレ（おやすみ）」などは、御所言葉由来の上品な響きを持っている。

7. 記録に残した大分方言（談話調査研究）

大分方言には貴重な財産がある。NHK大分放送局が「大分県方言の旅」という番組を制作し、県内各地の方言談話を収録・放送した。第1次期は昭和二十九年～同三十三年、第二次は昭和五八年～同六〇年である。離島や隣県の回もあり、同じ大分県であっても違う方言もあることが県民を驚かせたであろうと思われる。同番組の音声記録や文字起こし資料が『方言生活の実態』『方言生活三〇年の変容』上下巻として出版されている^{註1)}。

さて、この資料を方言研究に生かそうとして、発表者も所属する「大分方言五〇年の変容調査会」（のちに「方言談話

の変容調査会」に発展して改称。代表・杉村孝夫）が科学研究費助成金を得て結成された。調査は平成二二年～同二六年に行われた。このことにより、大分方言の談話資料で約五〇年間の比較ができるようになった。

その中で、「中津地方のデことば」、「玖珠地方のへことば」に発表者は注目している。これらは、疑問の文末がデ（ー）とへ（ー）になるという現象である。中津市では、「アンタ、ドコイクデ（あんた、どこいくのか？）」、「玖珠町では、「オキチヨルヘー（起きているか？）」などと言う。大分県内の広い地域では「ドコイクン（カ）」、「オキチヨルカエー」などと言うのに対し、これらの地域は他の大分方言とは違う言い方をするのである。

（一）は実際の音声を流した部分。）

平成二二年調査 中津市高年層

「アー アンタ、ナンデ。ドコエ イキヨッデ。」

（ああ、あんた、何ですか？どこへ行っているのですか？）

「〜デ（ー）」には、少しばかり丁寧な気持ちが入っているという。しかも、イントネーションが下降しない場合、「〜デ（ー）」は疑問ではなく、告知の意味になる。

「ワタシワ ホント ナカツワ ナンジューネンモツ

ズイテ マ コンナ ウレシーコター ネーデー。」（私
は本当、中津（雛祭り）は何十年も続いて、ま、こんな
嬉しいことはないよ。）

玖珠地方では、疑問のへ（またはへー）はあるが、告知の意味はない。

平成二三年調査 九重町高年層

「アサ ハエーケド オキチヨルヘー。」（朝 早いけど

起きているかい？）

「ハー。オキチヨルバイ。」（はい。起きていますよ。）

「マー アレカー ジップングライ タッチヨルカタ

ナー。」

（まあ あれから 十分ぐらい 経っているかなあ。）

「アー ソーヘー。」（ああ、そうかい。（相づち））

どちらも語源についての先行研究はないが、県内で広く使われている疑問の「〜カエ」「〜カイ」は、連母音が融合して「〜ケー」になりやすい。「ケー」から「へー」へは、千葉県方

言で「マケタ（負けた）」が「マヘタ」になる例がある。カ行の子音「k」↓ハ行の子音「h」になる例は他所でもあることから、音声変化の可能性が高い。また、「デ（ー）」については、「デスカエ」の「スカ」の部分が脱落して、「デエ」となり「デー」となった可能性もある。告知のデーとは区別がある（音の高低や長さ）ので、告知のデーは別の語源と考えるべきだろう。

ところで、「方言談話の変容調査会」は共通語に置き換わらない方言についての研究も進めている。

平成二二年調査から 杵築市山香町

夜の会話（相手宅から帰ろうとする…辞去の会話）

ンナラ モー コレデ カエルキ、オジャマシマシタ。

・・・高年層男性

（では もう これで 帰るから、お邪魔しました。）

ダケド ヒサビサニ キタンヤケン

マダ ユツクリ シテ イケバ イーヤンカ。

青年層女性

（だけど 久々に 来たんだから

まだ ゆっくり して 行けば いいじゃない。）

朝の会話（宿題を借りる）

ンー。ヨメサンニ オコラルルキナ、
モー ソロソロ カエルワー。 ……青年層男性
（うん。嫁さんに 叱られるからね、
もう そろそろ 帰るわ。）

マー、ナラ ウチモ チヤント ヤリタイケン、

トコロ アルケンサー、キョージューニ

カエシテ ホシーンヤ。ソレナラ カスケドー↑（上昇）

・・・中学生女性

（まあ、なら 私も ちゃんと やりたいから、

ところあるからさあ、今日中に

返して ほしいんだ。それなら 貸すけど？）

ンー ジャー、ハヤク オワツタラ

カエシニ クルケン。

・・・中学生男性

（うん じゃあ、早く 終わったら

返しに 来るから。）

この地域の五〇年前の資料との比較をしてみると、原因・

理由の「から」に当たる「キ(ー)」が高年層ほど多く、青年層では少なく、中学生では使われなくなり、代わりに「ケン」が使われるようになってきていることがわかる。共通語化なら「から」に変化するところが、共通語ではなく、福岡や熊本で使われている「ケン」になっているので、共通語化一辺倒ではない大分方言の変化の方向がわかるのである。

8. 新しい方言

方言はいずれ共通語化すると、一時は信じられていた。しかし、新方言が生まれているという報告や、『方言コスプレの時代』^{iv}という題の本の出版などから、方言が形を変えても生き続けていることがわかる。

(1) く「ヤ」ニー く「だ」よ 大分方言

竹田市長湯 中学生 二〇一二年

男…アレ オバチャンワ。(あれ、おばさんは?)

女…エー イマ オカーサン カイモン イッチョ

ンケン ウチガ ミセバン ションニ。(えー

今お母さんは買い物に行っているから、私が店

番しているのよ。)

男…ソーナン。(そうなの。)

女…ウン。(うん。)

「言語生活五〇年の変容」科研費調査より

(2) くコッセン (じゃない?) 宮崎方言

コレ、イーコッセン。(これ、良いことあらせん?)

オモシレーコッセン。(面白いことあらせん?)

雨、マダ フツチョコッセン。

(雨、まだ降つちよることあらせん?)

『これが九州方言の底力!』^v 岸江信介氏担当項3より

(3) ユーテ・ユーテモ (そう言っても) 東京周辺、関西

「ゆーても俺酒弱いからwww」

「俺もwwwゆーても潰れたことないけどなwww」

「大学生がよく言うことば

<http://matome.naver.jp/odai/2136289824818503301>より

(4) アーネ! (ああ、なるほどね!) 福岡、東京

二〇〇四年 福岡 女子大生

A 派遣会社で契約した方が、時給高いよ。

B ああ、そうなんや。

A うん、全然違うもん。

B あーね。

A 同じ仕事で、でも、なんか紹介料として、最初、

六百円とられるけど、時給的に二百円ぐらい違

うっちゃうね。(違うんだよね)

B ふーん。

大修館「国語情報室 WEB国語教室」

二階堂整氏担当ページより

9. おわりに

大分方言は、よそ者である私をもほっとさせる「魅力」がある。悪く言えば「規範意識が薄い」が、良く言えば「自由で伸び伸びとしている」言葉である方言。きっと、心の伸びやかさが、その土地の者でなくても伝わり、私をほっとさせるのだろう。発表時にいくつか質問をいただいた。未だにお答えできていないものもあり悔やまれるが、今後の課題としたい。

最後に、このような機会を与えてくださった別府史談会の方々に心より感謝申し上げます。

附記：発表した音声データは、平成二二～二三年科研費調査「言語

生活五〇年変容―大分県方言談話資料を比較して―」（課題

番号21520473 研究代表者 杉村孝夫）の研究の一部である。

注

- i 大分県総務部総務課編（一九九一）『大分県史 方言篇』pp.305-314 第五章第四節 主格のグ助詞
- ii 大西拓一郎著（二〇〇八）『シリーズ現代日本語の世界六 現代方言の世界』朝倉書店 pp.69-71
- iii 松田正義著（一九六〇）『方言生活の実態』明治書院、松田正義・糸井寛一・日高貢一郎著（一九九三）『方言生活30年の変容』上下巻 桜楓社
- iv 田中ゆかり著（二〇一一）『方言コスプレの時代―ニセ関西弁から龍馬語まで―』岩波書店
- v 九州方言研究会編（二〇〇九）『これが九州方言の底力！』大修館書店